# 自己学習を促すための基礎看護技術前期実技試験を試みて

東京医科大学看護専門学校・看護技術グループ
板橋和子・石塚睦子・井澤和代
田山友子・天野祥子

## I．はじめに

新カリキュラム施行後4年を経過した。その中で、基礎看護技術グループでは、1年次の履修科目である基礎看護技術の行動目標を明らかにした。さらに、学生の自己学習方法の教授、基礎看護技術校内学習の担当教員の増員、1年前・後期の実技試験の工夫などを行ない指導の強化をしてきた。

基礎看護技術の授業では、多くの技術項目を履修させるため、授業中に実施した内容の反復練習の時間は、ほとんど取れない。従って、臨床実習などの経験がなく、現実的な練習の必要性を実感しない1年生に、いかに反復練習の必要性を理解させ、自主学習へつなげるかは私たちの一つの課題であり、今回その対策として実技試験の方法を変更してみた。

その結果、授業時間外の実習室の利用頻度の増加・練習量の増加・VTR視聴・グループ討議が増えるという効果が見られたので、実技試験の経過・方法をまとめ報告する。

## II．研究目的・方法

### 1．目的

基礎看護技術前期実技試験前の自己学習状況と前期実技試験を実施しての試験結果と学生の学びを明らかにする。

### 2．対象及び方法

1）対象　本校29～31回生（1年次）

2）期間　平成4年～6年

3）方法

(1)　平成4年～6年の1年生(29～31回生)の前期実技試験前の校内実習申し込み用紙(表1)をもとに実習室利用状況を把握する。

(2)　平成6年度1年生（31回生：96名）に前期実技試験終了時アンケートを行い、以下の内容を把握する。

①　実技試験までの練習項目と回数

②　練習時の参考文献・使用教材

③　自信のある、またはない看護技術項目

④　前期実技試験で当たりたくなかった看護技術項目

⑤　前期実技試験の方法に対する意見

⑥　教員の協力・指導状況に対する意見

⑦　その他

(3)　アンケート回収率　96%

## III．前期実技試験の概要

### 1．目標

1年前期で学んだ基礎看護技術（日常生活への援助）が原理・原則に基き、対象の状況に合わせて実施できるか評価する。

### 2．前期実技試験の時期

前期実技試験は、表2に示したように日常生活行動への援助技術をほぼ履修した直後の1年次11月頃に行う。

**表1　校内実習申し込み書**

校内実習申し込み書

（授業時間外用）

| 申込月日 | 年　月　日 | 実習室使用者 |
|---|---|---|
| 実習項目 | | 学　年：　年 |
| 実習日時 | 月　日（　）<br>時　分 ～<br>時　分まで | 代表者：＿＿＿＿＿＿<br>氏　名： |
| 実習場所 | 第1・第2　実習室 | |
| 冷暖房 | 要　・　不要 | |
| 給湯 | 要　・　不要 | 人　数：　名 |
| 必要物品および実習方法： | | 担当教員　㊞ |
| ＊原則として前日までに科目担当教員に提出する | | 管財連絡　㊞ |

**表2　基礎看護技術の一年間の学習進度**

| 時期 | 5月初旬～9月中旬 | 9月中旬 | 10月 | 11月 | 1月下旬 | 2月中旬 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 基礎看護技術I | 看護技術の概念と展開方法<br>看護技術の概念<br>看護技術の展開方法（看護過程）<br>看護技術の学習方法<br>文献検索<br>視聴覚教材による学習方法<br>基本動作の学習方法 | 前期定期学科試験 | 中間学科試験 | 前期実技試験 | 後期定期実技試験 | 後期定期学科試験 |
| 基礎看護技術II | 基本的欲求充足への援助に関する基礎理論<br>日常生活行動の基本動作<br>関係職種との調整の基本動作 | | | 診療の看護技術の（看護過程<br>補助の基本動作展開方法事例展開演習） | | |

### 3．前期実技試験のオリエンテーション方法

1）前期実技試験オリエンテーション

実技試験日の2か月前に、試験内容と方法、評価方法、事前練習の期間と方法、服装・態度、などについて説明する。

平成4・5年度は、ベットメーキングと血圧測定の試験項目を事前に提示して試験を実施したが、平成6年度は試験項目を提示せず、9事例の説明をする。試験当日は、9事例中5事例（　　印）のみ出題する。（表3）

**表3　前期実技試験オリエンテーション時、提示事例問題**

　　印：試験時実施する事例問題

＜患者の状況＞

東山雅子さん、75才、女性、脳梗塞の後遺症で左半身麻痺が残っています。自力体動はできないが介助にて短時間の起座と立位になることは可能です。排泄はベット上での介助ですが時々失禁してしまう事があります。

**事例1**

東山さんが入院してきます。ベットメーキングと環境整備をして下さい。　(12分)

事例2

東山さんは洗髪を希望しています。ベット上でケリパードを使用して洗髪をして下さい。　(20分)

事例3

東山さんは左半身麻痺があり、麻痺側によく汗をかきます。体温・脈拍・呼吸を測定し、記録用紙に記入して下さい。(電子体温計使用)　(10分)

事例4

東山さんは体温測定後、38.2℃あり、手足は冷感がありました。氷枕とゴム湯タンポを貼用して下さい。　(10分)

**事例5**

東山さんは少し血圧が高めで降圧剤を服用しています。今朝の血圧は140/90mm Hgでした。これらの情報をもとに血圧測定をし、記録して下さい。　(8分)

**事例6**

東山さんは散歩を希望しています。散歩にいくために車椅子に移動させて下さい。　(7分)

**事例7**

東山さんは、足が冷えて眠れません。就寝前にベット上で足浴をしてください。　(12分)

事例8

ナースコールがあり訪室したところ、尿意の訴えがありました。介助して下さい。便器、尿器のどちらを使用するかは本人の好みを確認して下さい。　(7分)

**事例9**

背部を清拭し、寝衣（ゆかた式寝まき）を交換し、安楽に休ませてください。　(15分)

※（　）内は制限時間を示す。

2）試験会場の設営

試験会場は、実習室を使用し、図1の設営で行う。

3）試験項目と学生の動き

試験項目と学生の1グループ6人の動きは表4の通りである。

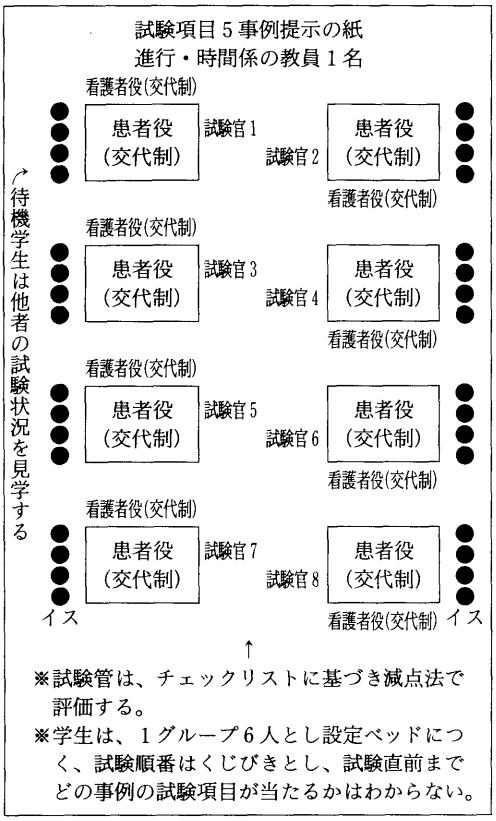


**図1　前期実技試験会場図**

## Ⅳ．結果

### 1．実習室利用状況

平成4～6年度の1年生の前期実技試験前における実習室の使用状況は、表5の通りである。実習室の利用は、昼休み・放課後・空き時間に活用されている。

### 2．31回生に関するアンケート集計結果

1）前期実技試験までの練習項目・回数・評価（表6参照）

練習回数の一番多かったのは、ベットメーキング・環境整備であった。評点も79.6点と高得点であった。麻痺患者の車椅子への移動の看護技術は、3.1回と練習量は少ないが評点は80.8点と最高で、不合格者もいなかった。洗髪、氷枕・湯タンポ、足浴、背部清拭などの湯や氷などの準備を要する項目は、練習回数が少ない。一度も練習しなかったという学生も多かった。血圧測定は、練習回数が多かったにもかかわらず評点が低かった。

2）練習時の参考文献・使用教材

練習時の使用教材は、授業で使用したチェックリスト、テキスト、および実習教材各種、VTRが活用されていた。

3）自信のある看護技術項目

ベットメーキング、移動、バイタルサイン測定の順であげている。理由は良く練習した、内容が簡単である・時間内で終了するなどをあげている。洗髪6名、背部清拭10名は、いろいろ工夫したので自信があると答えている。

4）前期実技試験で当たりたくない項目

試験に当たりたくない項目は、洗髪59名、背部清拭21名であった。理由は時間内に終わらない・準備が大変・手順が難しい・お湯の準備が面倒であるなどをあげている。

5）前期実技試験方法に対する意見

試験の時に、実施状況を見られることや他の学生の実施項目を見学することについては、やりがいがある、患者への言葉かけや工夫したところが参考になった。と60名の学生は、肯定的に受けとめている。28名の学生は、緊張し実力が発揮できなかったと感想を述べている。

6）教員の協力状況に対する意見

教員は練習しやすいように協力してくれたかについては、75名の学生は「はい」と答えている。だが、12名の学生は、放課後の練習の時教員が実習室にいない、などの不満が見られた。

7）その他

前期実技試験全体に関しての学生の感想として

・すべての項目の試験があった方が良い。
・一つ一つの看護技術をその都度試験してほしい。

**表4　試験項目と学生の動き**

| No. | オリエンテーション時提示項目 | 試験項目○印 | 試験時間 | 看護婦役 | 患者役 | 待機学生 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | ベットメーキング、環境整備 | ○ | 12分 | 学生1．2 | | 学生3．4．5．6 |
| 2 | 洗髪 | | | | | |
| 3 | バイタルサインの測定、記録 | | | | | |
| 4 | 氷枕、湯タンポ作成 | | | | | |
| 5 | 血圧測定、記録 | ○ | 10分 | 学生3 | 学生4 | 学生1．2．5．6 |
| 6 | 麻痺患者の車椅子移動 | ○ | 7分 | 学生4 | 学生5 | 学生1．2．3．6 |
| 7 | ベット上での足浴 | ○ | 12分 | 学生5 | 学生6 | 学生1．2．3．4 |
| 8 | 排尿介助 | | | | | |
| 9 | 背部清拭、寝衣交換、体位交換 | ○ | 15分 | 学生6 | 学生1 | 学生2．3．4．5 |

**表5　実習室利用状況**

| 年　度 | 回　生 | 人　数 | 校内実習申込件数（件） |
|---|---|---|---|
| 平成4年度 | 29 | 109 | 96 |
| 平成5年度 | 30 | 88 | 57 |
| 平成6年度 | 31 | 96 | 135 |

**表6　前期実技試験までの練習項目・回数と評価**

| 事例の看護技術 | 一度も練習しない | 最多練習人数 | 平均回数 | 前期実技試験項目○印 | 前期実技試験受験者数と評価 | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | 平均点 | 実施人数 | 不合格者 |
| 事例1．ベットメーキング・環境整備 | 1人 | (10回以上) 36人 | 6.7回 | ○ | 79.6 | 32 | 2 |
| 2．洗髪（ケリパード使用） | 16 | (5) 2 | 1.2 | | | | |
| 3．バイタルサイン測定・記録 | 12 | (10回以上) 3 | 2.6 | | | | |
| 4．氷枕・湯タンポ作成 | 31 | (10回以上) 1 | 1.3 | | | | |
| 5．血圧測定・記録 | 2 | (10回以上) 21 | 5.2 | ○ | 68.4 | 16 | 5 |
| 6．麻痺患者の車椅子への移動 | 4 | (6) 3 | 3.1 | ○ | 80.8 | 16 | 0 |
| 7．ベッド上での足浴 | 14 | (6) 2 | 1.5 | ○ | 66.5 | 16 | 5 |
| 8．排尿介助 | 5 | (8) 1 | 2.6 | | | | |
| 9．背部清拭・寝衣交換・体位交換 | 3 | (9) 1 | 2.3 | ○ | 69.1 | 16 | 4 |

・正解例を提示してほしい。
・チェック項目をオープンにしてほしい。
・実技試験を甘くみていた。
・試験に向かって友達と協力できたことが一番良かった。
・事例について友達といろいろ話し合った。
・練習が大切だということが実感できた。
・試験はやり直しがきくが本当の患者さんに

は、やり直しがきかない。
などがあげられている。

## V．参考

基礎看護技術前期実技試験における練習状況の把握と前期実技試験を実施しての学びを明らかにするために、試験終了後アンケート調査を行った。まず、実習室利用状況についてみてみると、表5からもわかるように、事前に試験の2項目を明確に説明していた平成4・5年度の場合の実習室利用状況と、事前に実技試験項目を多く伝えて試験をした今年度とでは、後者の方が実習室利用状況、練習項目・回数は増えている。その理由として、

① オリエンテーションを早めに行い、学生に練習の必要性を意識づけた。
② 学生は試験に出ないとわかっているものは、なかなか練習しない傾向にあり、多くの項目を提示すれば試験に合格するために多くの項目を練習する。
③ 試験範囲を多く伝えることや教員も広範囲の練習教材整備に努力した。

などがあげられる。練習回数の10回以上に含まれるものの中には、20回、30回と練習した学生もいた。

大下は「看護技術の学習は技を習得する学習であり技術の学習は、感覚系と運動系と協応動作の習熟となる。このような協応動作の学習は、練習の積み重ねによって習熟される。」[1]と述べている。応用力は原理・原則を踏まえ、何回も練習する中で身につけられるものである。

次に、練習項目と練習回数について、表6をもとに考察する。洗髪、罨法、足浴は、練習量が少なかった。その理由として、

① お湯を調整したり、準備に時間がかかる。
② 患者役が必要である。
③ 実施時間が長く、昼休みなどの短時間では練習ができない。
④ 状況設定してある内容から方法を自分たちで考えなければならない。

などがあげられている。同じ条件で練習量のやや多かった背部清拭・体位変換・寝衣交換については、前年度の実技試験項目であることが影響したものと思われる。参考文献や使用教材については、妥当なものが活用されていたと考える。授業で教員のデモンストレーションは見ているが、学生は実施していない足浴に関しては、VTRを活用して事前学習がなされていた。

自信のある看護技術項目については、結果2－3）で述べた通りである。学生は、内容が簡単で時間内で終了するものの他にいろいろ工夫したので自信があると答えている項目もあった。試験という外発的動機づけではあるが、練習をしている中で「分かる」「できる」という体験が学生に自信をつけさせ自主的な学習へとつながり、学習意欲を向上させることがわかった。

学生が当たりたくない項目で最も多数を占めていたのが洗髪だったが、今回は試験をしていない。次に多かったのが背部清拭・体位変換・寝衣交換であったが不合格者割合は、他の試験項目と大差は見られていない。

試験の方法として前期実技試験を静かな緊張感ある場で、多くの人から見られるようにして行ったことは、2/3の学生が勉強になると答えている。患者への言葉かけ、配慮の仕方、工夫点などたくさんの気づきをしている。

田島氏は「技術の学習では、その原理をある程度学んで、その後は、他人の技術をみたり、自分で考えた技術を実践する機会をくりかえし、自己の技術を確立するプロセスが必要である。」[2]と述べている。ある程度の緊張感の中で実力が出せるような練習の場をもつことや他者を客観視することでケアのあり方について振り替える機会をもつことは大切なことと考える。

また今回は、単に手順をチェックするのみ

でなく、患者の状況が考えられ、原理・原則を想起しながら練習できるように、援助項目の実施に当たって患者の状況を設定した。学生の中には、「患者がいかに負担なく援助が受けられるか、友達と練習しながら意見交換し、いろいろ工夫した」「患者はこのような状態だから自分はこのように考えたがそれで良いのか」などの意見や質問をよせた学生もいた。看護技術はこなすものではなく、相手の思いを組み入れ、自分の行った技術が患者の立場だったらどうか、患者の立場になって考える姿勢を身につけることが求められている。患者の状況設定をしたことは、多様な看護場面に活用できる応用力や対象に対しての配慮を身につけるには効果的であったと考える。

このような実技試験の方法は、平成5年の後期、そして今回と二度目の試みであるが、学生の反応から判断し自主的に反復練習を促すためには効果的であったと考える。

## Ⅵ．まとめ

このたび看護技術前期実技試験前の練習状況と試験結果および学生の学びについてまとめた。その結果、次のような結論を得ることができた。①事前に多くの試験項目を学生に提示し、練習の場・設備を解放することで学生の練習項目と練習量は増す。②反復練習することは、学生の自信につながり、学生は練習中の相互作用の中で工夫しあうと共に、達成感や充実感を味わうことができるということがわかった。試験結果不合格者は16人(17%)であったが、試験項目による差はほとんど見られなかった。

今後の課題は、①前年度の試験項目のみ練習することのないように、試験の方法を毎回考慮する。②自主的に自己学習できる様に学習環境の整備に努めていく。

尚、今回の調査結果は、あくまでも校内での練習状況についての結果であり、練習量と合格者・不合格者の関係については、把握できていない。

## Ⅶ．引用・参考文献

1）大下静香：基礎看護技術の構成と指導のポイント，教務と臨床指導者，7(2)．日総研，14，1993．
2）田島桂子：看護教育における看護技術教育の再検討，看護教育，35(13)，医学書院，1059，1994．
3）氏家幸子：基礎看護技術の「基礎」とは何か，看護教育34(9)，医学書院，1993．
4）村上みちこ他：看護技術の学習初期における自己学習に影響を与える因子，日本看護教育学教育学会誌，1993．
5）二ッ森栄子：臨床側とともに考える基礎技術到達度，看護教育，34(9)，医学書院，1993．
6）持永静代：援助技術指導と評価の実際，教務と臨床指導者，7(2)，日総研，1993．